西照

西照寺寺報「さいしょう」
第13号
2005年10月7日
発行　浄土真宗本願寺派　西照寺
高岡市吉久２丁目４－40

報恩講勤修

左記のとおり今年度の報恩講並びに前住職の七回忌法要をお勤めいたします。お参りくださいませ。

おつとめの時間

十月二十日　午後二時(逮夜)～
午後七時(初夜)～
二十一日　午前九時(晨朝)～
午前九時半(満日中)～
前住職七回忌法要

布教使　池内瑞雄師　新湊市中央町円徳寺)

西谷山　西照寺

報恩講のお斎は20日の午後からのみとさせていただきます。また21日の前住七回忌に伴う御膳等もございません。共々にご聴聞くださいませ。

何が真実のご利益なのか

浄土真宗はご利益を説いている教えです。それも真実のご利益です。大無量寿経には『恵むに真実の利をもつてせんと欲してなり』と説かれ、阿弥陀如来が真実のご利益もたらすために浄土を建立して、その全ての徳をお念仏に込めて、私たち（衆生）の救いを成就してくださったことが明らかにされています。また、親鸞聖人もお念仏をいただかれた生活のすばらしさを「現世利益和讃」などをとおして明らかにしてくださっています。

しかし、皆さんには、ピンとこないかもしれません。「えっ、いつから浄土真宗はご利益を説くようになったんですか」と問われる方もあるでしょう。確かに病気治しや家内安全・商売繁盛などのような世間一般で言われるご利益は、浄土真宗では直接は説いていません。ですから、世間で言われているご利益とは、質を異にするご利益と言うことができるのかも知れません。

ある七十歳過ぎの男性が、お医者さんに診てもらった時の話です。健康に不安があったその男性はお医者さんに聞きました。

（男性）「先生最近からだの調子が悪くて不安なんですが、このままで百歳くらいまで生きられるでしょうか。」

（医者）「あなた酒とか、タバコやりますか」

（男性）「いいえ、どちらもやりません」

（医者）「賭け事とか、女性に興味があるとか、趣味とか、何かありませんか。」

（男性）「いいえ、賭け事はやりません。特別趣味というのもありません。先生、それにこの年ですから、色気もへったくれもありませんわ。」

するとお医者さんは、

（医者）「それじゃ、あなた百まで生きて何するわけ？」

と言われたそうです。

笑うに笑えない話です。お医者さんは冗談のつもりで言われたのかも知れませんが、何が人間にとって大切なことなのかを考えさせてくれる話だと思います。

つまり、私たちの日暮らしは、「健康で長生きする」とか、それに「お金を儲ける」「立派な家に住む」「身を楽しませる」等々、生きていくための環境を豊かにするというか、「人間の外側」の利益を求めてという部分が多いのではないか。しかし、それだけでは生きられないのが人間である。もっと「人間の内面」というか、私の生きる意味や使命、願いや希望ということが大切な問題なのではないかということです。

確かに、健康で長生きすることはすばらしいことです。お金は無いより有った方がよい。やっぱり、立派な家に住みたいわけです。だけどよく考えてみると、それらは生きていくための「手段」であって「目的」ではないような気がします。ただ単に健康で長生きするだけのために私は生まれてきたのでしょうか。ただ単にお金を儲け、りっぱな家を建てるだけのために私の人生はあったのでしょうか。

そこに私の人生の「目的」は何かということが問われるわけです。

親鸞聖人は中国の曇鸞大師という方を大変尊敬されていました。その曇鸞様は、十五歳で出家し、広く内外の典籍を学び仏教学者となられています。偶々「大集経」という今日でいえば百科事典みたいような膨大な教典の註釈をはじめられますが、道半ばにして病気にかかってしまいました。こんなことではこの大事業は成し遂げられない。何とか健康で長生きせねばならない。そう思った大師は、揚子江の南に住む道教の第一人者といわれた陶弘景を尋ね、不老長生の仙術を問い、仙経を授かりました。

よろこび勇んで洛陽の都へ帰ってきます。その時、インドから来ていた「孫悟空」の話のモデルになっている経典翻訳僧（三蔵法師）菩提流支三蔵に会うわけです。

「仏教にはたくさんの経典がありますが、この身体を長らえさせる長生不死を説く仙経より勝れたものはないでしょう。」と大師は誇らしげに聞きます。すると三蔵法師は、

「あなたは一体何をやっているのか。どんなことをしても身体は必ず滅んでいきます。それよりも、あなたの生きる意味と目的を今仏法に問い、永遠の〔いのち〕を仏法から学び取ることが大切ではないのか。この〔観無量寿経〕を授けるから、真の利益とは何かをここから学びなさい」と喝破します。

今まで何を仏教から学んできたのか。深く恥入った曇鸞大師は仙経を焼き捨てて、長くお念仏の道に帰依せられたといいます。

そのところを親鸞様は、正信偈のなかに「三蔵流支、浄教を授けしかば、仙経を焚焼して楽邦に帰したまひき」とお述べになっています。

私たちにとって何が真実の利益になるのでしょうか。

阿弥陀如来は、私の「いのち」の生きる意味と目的を明らかにしてくださっています。

（文責住職）

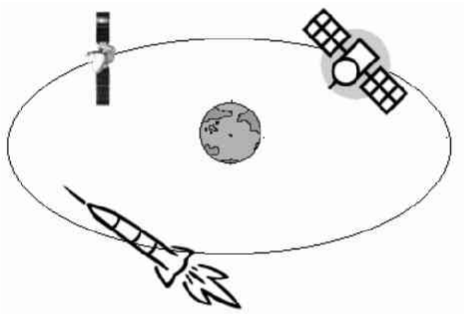
『本願力にあひぬれば　むなしくすぐるひとぞなき　功徳の宝海みちみちて　煩悩の濁水へだてなし』〈高僧和讃〉

真宗の行事　　＜修正会（元旦会）＞

正月の元旦にお勤まりになる法要を修正会といいます。修正とは、過ちを改め正しきを修めるということで、年のはじめに、仏の教えに照らして去った年の反省をし、新たな年の決意をするということかと思います。

地球を回っている人工衛星は、時折軌道修正しないと方向が違ったり、落ちてしまうそうです。宇宙船も時折軌道修正しないと目的地にいかないそうです。私たちも、毎年同じようなことを繰り返してはいますが、やはり時折は、真実なる仏に照らし出されて自分の軌道を修正する必要があるのでしょう。

「一年の計は元旦にあり」と古くから言われますが、元旦こそ自分を修正し計らう大切な機会かと思います。



西照寺では、元旦の朝7時から修正会〔元旦会〕をお勤めしています。

また、元旦は午前0時から朝まで本堂は開けてあります。どうぞお参りください。

明応二年(1493年)正月、京都山科の本願寺におられた蓮如上人のもとへ、近くの勧修寺村に住んでいた道徳という同行が新年のご挨拶にやって来ました。上人79歳、道徳はそれよりも少し上だったようです。当時としては両人ともかなりの長命です。

道徳が蓮如上人に新年のごあいさつを言おうとしたときです。上人は道徳に向かって「道徳はいくつになるぞ、道徳念仏申さるべし」と仰せられたことが、「蓮如上人御一代記聞書」に書き残されています。

私たちですと、正月が来るといくつになったといってよろこびます。道徳もかなりの長命で、そのことをよろこんでいるように見えたのでしょうか。蓮如上人は、長生きは、それはそれでよろこばしいことだが、自分の行く末をお念仏に聞き、念仏をよろこぶ私になることがもっと大切ではないのか、というお諭しをくださったのではないかと思います。